

氏名	オオクボ トモムツ 大久保 智 睦
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第241号
学位授与年月日	平成21年3月25日
学位論文等題目	〈作品〉樹々の眠り、透化 〈論文〉鏡映と空間形成
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 教授（美術学部） 手塚 雄 二
（論文第1副査）	〃 〃 （ 〃 ） 田 口 榮 一
（作品第1副査）	〃 准教授（ 〃 ） 吉 村 誠 司
（副査）	〃 教授（ 〃 ） 関 出
（ 〃 ）	〃 〃 （ 〃 ） 梅 原 幸 雄

（論文内容の要旨）

平凡な日常の中にも「心魅かれる一瞬」があり、「心惹かれる風景」がある。しかもそれは瞬時にして訪れ、瞬時にして消えてしまう儂いものかもしれない、それがいつも同じ時、同じ場所に訪れるとは限らない。私はそれを日常の中に開かれた「覗き穴」と呼び、その背後に茫漠と広がる未知なる世界を感知する。このような体験が、創作の発端となり、モチーフの発見となるだろう。

私は「鏡映」と「水」という概念を接点に据えた作品を描いてきた。「鏡映」とは、通常の視覚がとらえた実像を一次的な要素として画面に取り込み、非日常的な二次的な要素を同一画面に映り込ませることによって、画面そのものを再構築する描法をいう。日常に見る一次的なモチーフに、鏡面の「映り込み」を援用して二次的なモチーフを重ね合わせる。言い換えれば、見慣れた風景の中に異質の存在を「鏡映」させることによって、実景とは異なる擬似空間を創出する。

「鏡映」空間に描かれるのは、さまざまなメタファーをもつ「水」である。水は生命を象徴するだけでなく死をも暗示する。さらに生と死が未分化な幽明そのものをあらわすこともある。そのような多様性をもつ「水」を生命の流れとしてとらえ、暗示として描くことで、未知なる内界を具現化してゆく。

このような「水」を描くには、自分自身の主観性を客体化する外からの視点が必要になる。私が「鏡映」、あるいは「映り込み」と言うとき、そこに描かれた画面には主観的なものと客観的なものが混在している。それらを統一する補助線として、メタファーとしての「水」を想定することで主題性を獲得できる。

本論の構成は次のようになっている。

### 第一章「絵画制作における原風景の探求」

「私の原風景（環境と触れあった場所）」では、創作主体としての原点を確かめることによって、「構築された自然」の中で育った自然観が、どのようにして形成されたのかを検証する。「鏡映」への関心はこの環境に関わりがある。

「鏡映化する現代」では、オギュスタン・ベルクの風土論・風景論に触れ、ベルクの「隙間」理論と、私の「鏡映」理論を比較検証している。ベルクは東京の片隅にある隙間は、聖性に向かって開かれた「裂け目」だという。私はそれを世界に向かって開かれた「覗き穴」と考える。

「衰弱する自然・あるいは叛逆する自然」において、地球環境の破壊による自然の衰弱と、そのため

生活圏を剥奪された少数民族に触れ、メタファーとしての「水」、樹木や鳥たちに象徴される生命体が、「鏡映空間」を形成していることを確認する。

「作品の制作ということ」では、「作品は作家にとって常に発見でなければならない」と論じた武田泰淳や、「芸術が現実世界でなんらかの正当な位置を与えられるとしたら、それは芸術が未来への予感を暗示することにある」と主張する池田満寿夫の意見を引用し、自分の作品世界を「覗き穴」と自覚するに至った経由を述べる。

「正気と狂気の狭間における芸術の役割」では、社会心理学者エーリッヒ・フロムの「われわれの感覚によって世界に反応する」「自分自身と世界を芸術的に関係づける」という論旨と、私の「鏡映」理論との共通項を比較検証する。

## 第二章 「水と鏡の原像」

「鏡映」のメタファーとしての「水」は、「水平の水」「垂直の水」「封じられた水」「噴出する水」に分類できる。すなわち、樹木の毛細管から吸い上げられる「垂直の水」、河川を流れ湖沼をうるおす「水平の水」、花瓶や壺に込められた「封じられた水」、噴水や瀑布となって「噴出する水」である。それらの定義を試みた上で、ミレイ《オフィーリア》、菱田春草《水鏡》をはじめとする、古今の先行作品を、「鏡映」ないし「水」という視点から読み解いてゆく。

## 第三章 《源氏物語絵巻》にみる「鏡映空間」

徳川美術館所蔵の国宝《源氏物語絵巻》の現状模写を通じて、私の作画手法の「鏡映」と通底するものがあることを確かめてきた。私が担当したのは「橋姫」と「鈴虫二」（五島美術館蔵）である。この二作品を模写するに当たって、私が関心を持ったのは、一枚の絵の中に如何にして物語の「時」を描くかということであった。「橋姫」には、重層的な「時」を暗示する工夫が仕掛けられている。同一画面の中に、多元的な情景が「鏡映」しているのである。また「鈴虫二」では、異なる場面の情景が無理なく一場面に描かれており、多重性をもつ「鏡映」空間を構成している。いわゆる「異時同図法」とは異なる工夫によって、空間と時間を表現している。

## 第四章 「描かれた鏡映における私的考察」

私の作品を制作年代順に追うことで、メタファーとしての「水」、作画法としての「鏡映」が、どのような経過で描かれてきたかを検証する。描くことに自覚的でなければならないと思うようになったのは、自分の作品に「鏡映」という概念を取り込んでからであった。そこに「現代との接点」を感知し、日本画を描いてゆくことへの根拠を見出したのである。

(博士論文審査結果の要旨)

本論文は、作品を何故に、何を、どのように描くかを絶えず思索し、自省しながら実作品の足跡をたどった論考である。論者は、描くこと、創造することに自覚的でなければならないと真摯に考え続けてきた。制作する絵画を様々な問題を抱え閉塞する不可避な現実世界への「開かれた隙間」、「穿たれた覗き穴」と捉え、次第に明確な意識をもって「鏡映」という作画法や「水」をメタファーとするモチーフを描くようになる。「鏡映」とはいわば実像と虚像を重ね映り込ませることであり、そこに形成される空間に、生を象徴し死をも暗示する多義性を持った「水」、作品に即していえば樹木や鳥たちの生命の輝きを描き出し、観るものを感じさせるのである。

多感な少年期を多摩ニュータウンといういわば構築された自然のなかで過ごした論者が、その自然観を振り返りつつ、オギュスタン・ベルクの風景論に導かれて、それが現代の若者の原風景と何ら変わる

ところがない、そこで形成された感性を突きつめていけば普遍性に到達できると確信するくだりに見られるように、論者は現代の風土学から聖書・仏典、芸術論に至る実に多様な論説を読み込み自らの思考を高めている。また「水」や「鏡」をテーマとする古今東西の先行作品を鋭い感性と洞察力で俯瞰し、徳川・五島本源氏物語絵巻「橘姫」「鈴虫」の模写を通して、それらが重層的な時を暗示し、多重性を持つ「鏡映」空間を造りだしていることを、源氏物語の深い読みから解き明かすなど、論説のレベルは並々ならぬものがある。

最新の提出作品《蒼穹の彼方より》について、ここにおいて「わたしはようやく画家としての出発点に立てたような気がする」と述べた最後の言葉の意義は大きい。このように博士論文の思索・執筆と作品創造の実践とが着実に結合し、そこで優れた果実が収穫されたことは、実技系博士課程論文として理想的であり、本論は極めて高く評価される。

#### (作品審査結果の要旨)

大久保君は卒業制作「静謐空間」から一貫して墨を主体に制作を続けてきた。日本古来の絵具である墨を彼独自のものに消化したのは修了制作「MIRAGE-1～鏡面の街角」からではないだろうか。修了制作は今回のテーマである鏡の元となった作品であり、彼の奥に潜んでいた絵画観を導き出したモチーフでもある。博士課程に入り学ぶことにより、彼の作画である鏡面化してゆく自然と、実在の自然を融合した心象風景画は、独自の色彩と表現により彼自身の心の動きまでを感じさせる表現に辿り着いたように思う。

彼の構図には修了制作をはじめ「園」「流影」「樹々の眠り」「睥睨」等、画面上部から下部へ見せ場を作る作品が多い。画面上部を暗くし、下方へ焦点をあてる作画は、心地よい不安感をもたらし、作者の心を表現するに相応しい組み立て方である。また、表現方法も多彩で、模写で培った経験をもとに技術の確かさを感じる事が出来る。ただ、「水影」においては情景描写に頼り、彼の世界が表現されてはいない。新しい試みというよりも実風景のコピーでしかない。これは写実絵画を描く上で誰もが流される危険性を秘めている。自分の気持ちを画面で表現することは作家にとって一生の課題であり精進していかなければならない目標である。

最後の作品「蒼穹の彼方より」は原色を主体としているが、大久保君の気持ちが入った表現として新たな展開を見せている。今後、賛否両論は有ると思うが、自分に厳しく向かい合い、どのような作品においても自分の気持ちを忘れずに制作していくことを願ってやまない。

私は、彼が博士課程で自分を確立しようとする真摯な姿勢とその作品を高く評価している。

#### (総合審査結果の要旨)

大久保君は、修了制作で墨を主体にガラスに映った風景を描いている。ある種焦げ臭いその作品は博士課程に入り彼独特の臭いとなって作品に表れた。

論文によると、ガラスに映った虚と実の風景から始まる彼独自の作風は「彼の育った環境に在る」という。新興住宅地という造られた自然の中で暮らしながらも時にはモンゴル等の大自然を目の当たりにする機会を得た少年時代を振り返ったときに、彼の感性が新たな作品を生み出した。彼にとっては「造られた自然」だけが心に残り違和感となって作品に表現されはじめる。虚と実というあいまいな世界を二次元の世界で表現することを試みだしたのだ。彼の絵は、写実と共に自己の体験を加味する事によって独自色の強い画面へと移行していった。では、本当の自然に触れた作者が造られた自然で生まれた世界観は彼の中でどのように変化していったのだろうか。論文ではその心の動きにより変化した絵画感を説明している。

人は、100人いれば100通りの体験があり100通りの世界観を持っている。大久保君の体験も100通りの1つである。しかし、博士課程では、彼の感受性と修士で学んだ表現方法（技）が結びつき彼独自の表現を確立していったのである。論文に引用された文字に「独創なるものは存在し得ない」「大切なのは辛抱力であり芸術の歴史は模倣の歴史である。」と書かれている。人間社会が発展してきた過程において「過去」「今」を踏まえて新たな世界を築いてきたように、芸術も「過去」「今」の創作の上に新たな作品が生まれてきているのである。彼の作品は伝統を踏まえ、模写の経験と彼自身の心の綾とが織りなした表現である。

彼の論文を読んで作品との整合性を感じると共に独特の作風を生み出したことを高く評価し、審査員全員の協議の結果、学位授与に値すると判断し合格とした。